

## 失つて知る望郷の念

「やまなし随想」 120602

時は、今から4年ほど前の早春。所は栃木市大平町。そこで開かれた国主催の地域情報化フォーラムでのことでした。今渦中の町、福島県双葉郡浪江町の住民の皆さんの体験発表が行われ、聴衆に大きな感銘を与えました。

折しもその頃、国の政策として「観光立国」が提起され、浪江町でもわが町の観光スポットを探そうということになりました。そこで町の教育委員会主催の「わが町CMコンテスト」というものが企画されました。これは、町の見どころや歴史・文化・産業など、町外の人々に誇れるシーンを60秒のコンテンツとして作成し、その出来・不出来を競おうというものです。

募集を始めても一向に作品は出てきませんでした。多くの町民、わけても長く浪江町に居住していた住民ほど、この町には他人に誇れるような良い処などあるわけがないと端から決めてかかっていたためです。他方、この町には首都圏から移り住んできた少数の住民がおりました。隣町の原子力発電所に関わる電力

会社やその下請け企業などの社員とその家族たちです。これらにニューカマーたちが浪江町に移り住んでみると、そこには山あり、川あり、海あり。きれいな空気に包まれて、喘息を患っていた子供たちもすっかり元気になって、世界にこんな良いところがあったのだ、と彼らは新天地浪江町を「発見」しておりました。

「わが町CMコンテスト」に応募してきたのは専らこういう新住民ばかり。あっちの浜辺、こっちの山と、町の好い処を映像にまとめ、CM作品を提出してきました。その受賞作品を見に来た住民たちは、「よそ者」たちの異化した目を通して知らされたわが町の良い処に大いに感激した、というのがフォーラムでの報告の主旨でした。

その浪江町、東日本大震災の津波と福島第一原発事故による放射能汚染に見舞われ、未だに町には南北に走るホットスポットの帯が縦貫しています。「逢ひみてのちの心にくらぶれば昔は物を思はざりけり」（権中納言敦忠）。浪江町のすばらしさを改めて知ってしまった人々にとって、失ったものの大きさは甚大。今、望郷の念はつのるばかりです。

